令和5年1月31日

主文

本件再審査請求を棄却する。

事実

第1 再審査請求の趣旨

再審査請求人(以下「請求人」という。)の再審査請求の趣旨は、遺族厚生年金の支給を求めるといことである。

第2 事案の概要

1 事案の概要

本件は、老齢厚生年金の受給権者であり、請求人の夫であるAが死亡したため、遺族厚生年金の裁定を請求した請求人に対し、厚生労働大臣が、被保険者であった者を故意に死亡させたとして、遺族厚生年金を支給しない旨の処分(以下「原処分」という。)をしたところ、請求人が、原処分を不服として、標記の社会保険審査官に対する審査請求を経て、当審査会に対し、再審査請求をしたという事案である。

2 本件再審査請求に至る経緯

本件記録によると、請求人が本件再審査請求をするに至る経緯として、次の事実が認められる。

- (1) 請求人は、令和○年○月○日(受付)、厚生労働大臣に対し、平成○年○月○日に死亡したAの妻であるとして、遺族厚生年金の裁定を請求した。
- (2) 厚生労働大臣は、令和○年○月○日付けで、請求人に対し、「被保険者又は被保険者であった者を故意に死亡させた者には、支給しないため。」として、遺族厚生年金を支給しない旨の処分(原処分)をした。
- (3) 請求人は、原処分を不服とし、標記の社会保険審査官に対する審査請求を経て、当審査会に対し、再審査請求をした。

第3 当事者等の主張の要旨

(略)

理由

第1 問題点

- 1 老齢厚生年金の受給権者が死亡したときは、原則として、その配偶者で死亡した者によって生計を維持していた者に遺族厚生年金が支給される。しかし、厚生年金保険法(以下「厚年法」という。)第76条第1項は、被保険者又は被保険者であった者を故意に死亡させた者には遺族厚生年金を支給しない旨を定めている。
- 2 本件においては、Aがその死亡の当時老齢厚生年金の受給権者であったこと、請求人がAと戸籍上婚姻の届出をした夫婦であり、Aと生計を同じくしていた者であったこと、及び請求人が年額850万以上の収入を将来にわたって有すると認められる者以外の者であることについては、本件記録から明らかであり、この点について、当事者間の争いはないと認められるところ、請求人は、前記「事実」欄第2の2(2)記載の理由で遺族厚生年金を支給しない旨の原処分がされたことを不服としているのであるから、本件の問題点は、請求人が、Aを故意に死亡させた者に該当しないと認められるかどうかということである。

第2 事実の認定及び判断

1 「略」

- 2 以上の認定事実に基づいて、本件の問題点について検討し、判断する。

- (1) Aの死体検案書には、死因の種類として「その他及び不詳の外因」、外因死の追加事項の手段及び状況として「肺癌のため自宅療養中であった。横になっているところ、鼻口部を布製タオル・枕で圧迫されたという。」と記載されており、本件刑事事件の判決要旨の量刑の理由には「被害者から手を振るなどの抵抗を受けてもお犯行を継続していることからすれば、殺意は突発的なものではあるが、強いものであったといえる。」との記載があることからすれば、請求人は、Aを故意により死亡させたとも認めるのが相当である。

したがって、請求人は、厚年法第76

条第1項に該当するので、遺族厚生年金支給の対象にはならない。

- (2) これに対し、請求人は、Aの疾病にかかる極度の不安などから精神状況が不安定な状態になり、正常な判断能力が失われていたのであり、その殺害行為には汲むべき事情がある。また、請求人の行為に悪質性がなく、実刑に処せられずに執行猶予になっていることから、厚年法第76条第1項に規定するところの「被保険者又は被保険者であった者を故意に死亡させた者」の例外的扱いにより遺族厚生年金を支給すべきと主張する。

確かに、本件記録によれば、請求人には、平成〇年〇月〇日に自宅において、重度から中等度の大うつ病性障害の影響によって判断能力が著しく低下した心神耗弱の状態にあったこと等の執行猶予とすべき汲むべき事情があったことがうかがわれる。しかしながら、殺意をもって、Aを死亡させたと認められることは上記のとおりであり、厚年法第76条第1項に除外規定がない以上、請求人が、Aを故意に死亡させた者に該当しないと認めることは困難であると言わざるを得ない。

- (3) したがって、請求人に対し遺族厚生年金を支給しないものとした原処分は妥当であって、これを取り消すことはできない。

以上の理由によって、主文のとおり裁決する。